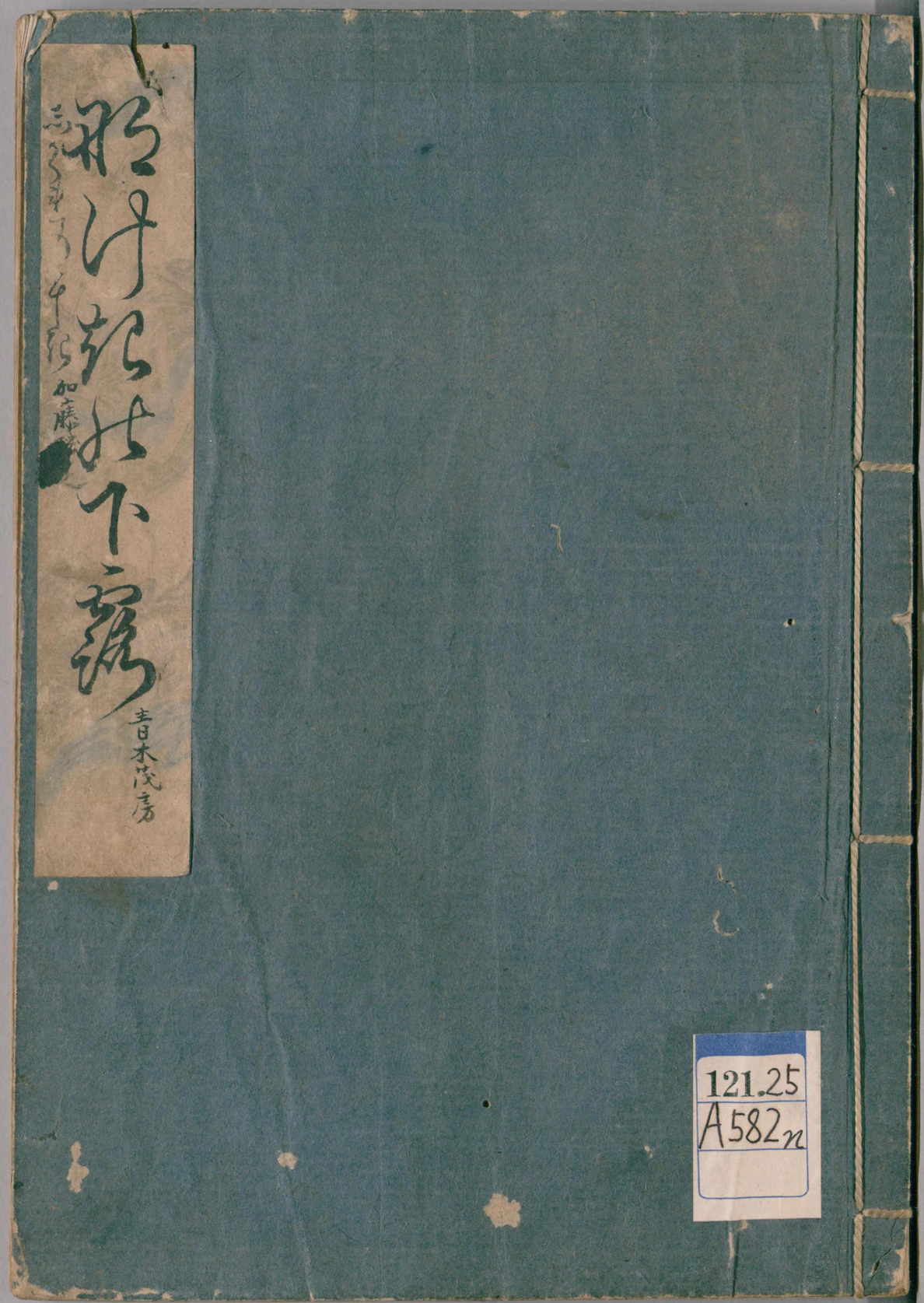


121.25
A582n

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

121.25 A 582n

帝國圖書館藏

國立國會
24.0 5
圖書館

25197

那藏なる物にはあら
師乃君なくあわたまひしを恋しく思ふ事はやるかたなく思
ふるさとの物うのときい人そもそのたりるとそれば心のなるさむ
日山形りと思ひくくこのかくふ蔭きあるまを手なりひ乃
やうに思るて思むとそもくく九月十八日のころより
風はたちの蔭うに思ら心ぬるはぬのほどい
こそくくしきやうふも物しのそはたれもく心ゆる
ての少のるふひうわ初るるはかに七日はなりいとたのもげ
あくはわのへ思を市もとは人くふはらるもいそをてへ
ゆうくゆるるの少もかくもたくくく奉るまぎわつを
はるるるのふうをまりて為といわ
つくおのの家こよわふひくまる神の市御ろにそこま

伴氏新藏

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

けしこまもつかひ様にてたまはる人おほかりしもさる人
の末とふかひなき人々くらしてくまさりし心ざしあつくてかゝり
御遊もけくりて御手御学ねなといふにもくにおりみて今
ありくなりたまふべきかはあるやうなるをいふをたのもしと
こゝろへてはじめし数々もはかなくなりぬ御むすめの君たちは
御勢仏まへ左あへにくる湯なとまでめん居たまへりまれは
風はこゝちの病やまひうてられぬまきははかなくなりぬるの秋
にはしたがくしくはあくまでおなし御修よりくなりぬと思ひ
またおもひし十八日にいとおもき御病の家にへひつましは御とゑ
さようりいつまで清めりつるにたちや太平ぬし高藤安守かと
つとめねまかりなかし御りて親持光保もとくにふよ事
きみれ　よ称ふいのりむつとめていつのまかせいふにたまひ

あのこゝをかまへさうそいつまでものめんとおもひたるむ君歸は此かの
の様こゝろ師乃家まつまくはゆゑつうしをするし蒲をいふ君のさめ
あらむの多く岐ま家いつまぬといふ物へりまつ真ま渡會要王は給
は二の宮よりのらむなとといひ法のまそて森の光保はとくも
そのうちんとて家まのへまぬむさくなくかく光保の末
なれはあれし庭うとふよ物るを世にまかへくらひぬ近
清やあひそんりむはほかくゞまいつてまでせるとを之高
なとの宣残とぶ如くまたむとへ此いひつといはるいて
師は家の此やまひも甚くさるを極めかなの候ひしといとなる
ありくて此ほとくましもまいらし　ねいのつなかにつたふ
まへふそいとたのみきてさくなんたのみえさせとたゝもち
かふへ　たまちたまそあまそすわさうさとやまそまふす

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

享保十五年庚戌五月七日子刻誕生
享和元年辛酉九月廿九日暁他界　七十二歳

もあるへしとのふはいふくりかへすかへすも心ちにいのりをこそ
かと君もなりぬるまいしはし家にかへりなんとおもひて帰りぬる
まなほ風の筆みやいみしくあらいたく法印師のえみ
心あうらせて孫もやらぬは禅中するあるかなをあらくたれ
なかるぞとへしてとくをくまる本居かりといふはいふくとくえまを
うへりぬといふもむつふかくいとふちをてく葬れはなちして
尊の聖のみぎりえも此待るありめてるてうはいやいこその
ことなくしやうさとまの何かり大奉りくさいそむもおちあき
せらめんと立出んとまほりかりくるまき風れとちのあや
にくるまるしてとのくためしふと滞りかとるほかくとしらと
ゆくまむ何はたくしくらく孫んていそま了ありぬるの尊

ゆほとは太平好の君安房守光保国守此五人とさしむかひぬるを
まくにいふめんこそきれふまかはし更おほくつとへまとといとまう
くしこをゆくなくして伊ゆのちうくさむらへえお枕れもとふ
ゆむまこの君うち御せまためれ思くちみあふしき悔しそくなち
あたまへりなきゆかうちに一文なき事はつねまのはしをあてぬゆのう
ちまくねたまへるやうなるを見るにすまはあらまなかえたとも
まかりし

きのふまてくもしらてたのみぬるおもかけ此ほとそはかの
なかりけるけふ此九日まくれ杖のとちめ

享和元年九月小

大かたも杖のとの枕にをしめても古のれしさそせん
うくもたく松さてく北等道のことかうれて道とをしすへるまつをそ
こともも佳のやうるとて枕とひかれるへくは大平の好をはしめ

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n
ガラス使用

親持 興枝 高信 國秀 安守 定之 定好 光重 おのゝゆるし
元義 重良 光保 忠之 利長 光房なにかれ
きこゆれとも何くれといとなみつゝほとなく月もかはりぬ一七日二七日
たゝまるこのちうゐんのほとはかなきのゝもとにけさつとめて
かくといひおこしつゝ夕つかた来りて 蒲田政信 定平 光則 何かし 林蒲 義知 こと和従ならひ
しゆあるをむねとたてまつるはかりいふもなほうたのしきよてなり
ける皆人くちなけきつゝ我もふけぬ物からちうくなかりてゆえ
かゝるを残さめたてまつるへきものゝ木の道みちくみのよしてまかたり
さるを櫃たとふものゝさきしたり因もあとを白ぬまて試してか
よそひみるにもいとゆゝしそのほとゆゆのことを侍りまゐりて身き
ありかなしいるは十德といふもをはしきをたてまつりて白木駒てりは
た刀をはつを奉りぬゆゑし色桜のまうまて光そいはまよりゆれ
てかきのたてまつりぬかくて家にかへりゆくのほりとそおほえて

ありおほいとくろし風のいみしく吹よるふまもさそたる火もき
ゝまのりあとも見えぬをいとくるしやとくへのいふかひなき光りのそへ
ら来て
ゆく道もなをしへ子とも皆まよふ光も志らるゝや君のかく
ま酒しもむさて十月廿日まもなかりぬ志をし給ぬるほとなる日いみ
しくさしはありてうまれ時のこゝろまさむしひつねと平ぬしを
はしめをしへ子うちまゐりきたる程となり 高英 光保 光房 安喜 元義 重良 親持 忠之
某なにはまことやまつのふ芳山の篤なりとて京よりかへまゐり何かれ
此ゆきよいみしくおほつのかなり手のまうしそのしおなすこちよね
らをかへしは七月のとかすりむとほのへし皆かく月日の色ぬ
ることのたまひしことをふとおもひいてられて
まちことにしなしはいまさていまそなゝめかはれたまひそくるの

国立国会図書館 タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』 請求記号 121.25-A582n
ガラス使用

忍びの玉つはとみなしつゝもなほ愁しくなん二日になりかへりて
師はきのふのつくゑをおきあへりし御寺ら山室といふ山のこなたにはるま
れくもまゐらむとて立よりしくるところにあまたの子ども上下といふ
ものいまだくまねりつゝふさしの時まことのゝしていてたちたまへ
てほとけつくりちかたのことはけしきみて、まつそしめる侍武人
またとともに家の紋付たる挑灯といふもの、さるかのこなたのこ人ま
たちろくしをかたるかなしかりのこなたるも内て御いのりきは備ふる此
のりものゝよはきをもちりて白き布もておほひてかつそのみきにはさ
そうてみはうしは刀さきげしともちくくそのつりといふ男さふら
ふさくなげきなさけはさみぞきも紫菅なとといふものゝあれもみきたり
ひたすらむつらなるわたる百はものゝこなたき布しくおほひて
素庵ちの女このたり一人ふたとひもとも一人二人ゐりしたかひ太郎ぬ

こもそのつきそはれたるさもへなりまくそのほか宗相範とのやい
ふとりのまなくるすのをもつかなりあるかなきにおほ絶さつくそは
むすくたち士四人三郎まねをしぞこもすまはぬにかくしてへ子どもや庵で
て向しく三郎平三なりけつさ取ませより長郎光保直道光定
藤親持正雄為方具枝有信秋満元義光秀安守正具ゝ子具重良郎
元光之宗之宗平光則為直利長宗好そのものおほし総久素房光
これまでもこれをまゐらせて御供しなる樹敬寺とて師の先祖先
祖の御えのいところいかる寺は法師も御供したる此寺かそなんその世
はもの式なともしこれらの後素庵素白などといふ庵の何さ
乃十徳といふものゝよきこの人ならずして此寺のそともは門よりいらせ
しろは町尾町菅田なとを経てかは山室にゆのんとも町庵
をはなれや錦路をゆくまやのへつは里をとほりいと広き
此路我まぐ花名山に又まえて山そはの道より山室村よゝ

25497

[illegible]日も暮ぬまでみれば桃灯といふものゝ火もてをてゝ毎
夜あまりにてらせばてらせまぐ〳〵百張はかりはてゝちんおとろ〳〵しうとり
はかり〳〵ゆく墓のもとをもしるをもきて墓に近いてをるに
あ〳〵涙ぞこぼれんとぞおもひかへしかく妙楽寺宮の寺なりといふまぬ
ぬ[illegible]をるハさてもいはゞ愛なるこゝのわくをしてゝ
墓とをるよりあるをゆく世をるのまへなるところあけをよ板
碑はのほるをしゆきつゝをてゝをのよめゝりをへをはくはををを
ゝをゝ墓のをゝ一丈ばかりををまをるく四こんばかりのをを
をゝ山はやうにをたう一桜二本松一本をるくをのまへふをの
はかはをのをゝをたて本居宣長之奥墓とをるをゝ
こをおをの杖より些事ゝはををへをゝこをゝをみはをゝ出た
まへをるをゝ些事のををひはををゝ些事をのはて

おをるのをゝはをゝをををゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をゝをゝ墓はやうををゝはをゝはをゝをゝをゝ一のをゝ
たゝをゝ一をの山をゝをゝはををゝ一のをゝ
神学月をゝ墓はをゝをのをゝををゝはをゝはをゝ
をゝをゝをゝ墓のをゝをゝをゝ山へはいはををゝ
はをゝはをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
のをゝはをゝはをゝはをゝはをゝはをゝ師はをゝ
はをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をゝをゝをゝ秋津比古義豆櫻祢大及と申たてまつ
る春夏冬をををめはをゝはをゝをゝをゝ
をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をゝをゝをゝ高岳院石上道啓居士とをいふはを

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

京の時てゝありしとなりぬまこと妙正寺ふかへまくるさう四町
はのりしたる雲なりけりこのの山も妙寺れ山なりしとゝ
をしれりとみあこのへりぬ其つゝ云よう寺ゝ右とよ堂を拾
ゝ也人ゝちゝ又ゝうゝへゝをゝゝ山りきこのゝゝ者ゝひ
妙寺ふとゝまれる人ゝ尾張れ名古屋人植松の有信あれ
ゝ也人ゝ河村のまゝ雄れのれとゝたゝ有信といふを
師の名れてゝあつまゝゝふれたゝをもあ屋このふつゝう分
法ゝ人ゝまゝ師れ名を法ゝ人ゝゝこゝに心ゝゝゝてゝゝ
らしゝゝふゝとゝもゝのゝ法ゝ我此人ゝあゝゝふゝゝゝ云
しゝあゝゝゝまゝゝ山ゝゝたゝゝゝゝゝゝを具ゝ
ゝまゝりてゝゝゝゝゝたゝ物せゝゝまゝゝゝふこのゝたゝゝく
れゝゝゝのゝ二日といふをゝゝゝ神奥月部日の教奥藩

ゝゝこゝゝまゝりゝゝゝれたりゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今ちかたきとこのたのまむとてなのりたたせあらけてあだきを
むまていはるる
きさのみとあるふうきもたるまてこをあらうまふふ
はるるるるうるはのなるべて雨るる時のまのことをみく
雪ゆ
ふもまあるおつるふいるまこ海さるとに風よふる雲枝
うるこ雄るめさまてうれのるるるを曉なありおき侍ん
なといはるる聲まれとるれくいつは月よねぐりつくんと見ゆ
れ雪とつふにきやうは蘇くる花るこきはぐとてたくるまく
きこたきはくるるのおいくうはきまはるるとれのるまのれれこ
やうくこちくゆくるさくじいはけてこいたとこれ松原はまるあるや
うたりとるまむこちとれ自へふあるあらきぬ京原花遠近
なとのこまくもたるのいとうくつん花大品雲なとるこ母もの
ゆきふもたるるおちるは雨るそこんきんこちるそはぐこと
をのくふりこへの居りおるくはるるるを今十とをばの
またぐくへたるひたる
いのこれ雪まあふるうふと三寸ものるくはくきをつるに
つけくもたといひつくをるる為ふりいくぬ雨旅るあへる月りな
むとてそのいこれくはいくるるこふるれぬるくをふふ
まこをうまんるれ雨くれこをのふる年のくれるいて四
はくれとこのひはみたるるくくよまる家なりぬさく
有信と申とる侍雪まるまくてんとてこのの為る道ものの
うて本屋といふものそれてのれるのくるいきのふりこよ
あくるるくくる侍雪つきそをこまりてもたきのあたる

免るゝをよいみしく君のしらせ給ふ中風のことゝもみ侍るを
かろしと思ふるよ松にのこせる此おもひをそへて書つゞけたまへる
なり

松はつねかはらぬ色のさかしさをいふなる世のためしにさは
まくらむ文をとゞめ道をまもるへくてそのこゝろさしなり
のため此年の程とせけはつりゐるかいくまでいとふかくあれ
なる教まで物されけれは此君は此妻の御墓ところさへあつめた
まふし時る百年もいのちすへくおもひてそれのうさきにとゞめ
おきたまひしかこともやうなるものなしつる世の翁といふしくらゆん
きていはましみしかなることを忘れぬ翁もやみて家のうちま
もそれゆゑそれしも榛木の宮にて垣ははえをさまたけれなるを
ののかなるこれときたなれは何それの梢をたてるまうしぬ

をしけとるいつまことは其花をかぬといふもののなけしかもとに
あらんを常にめでゝ花はよむ歌なともあけぬあたを畑つくる
人らしぬく云ふなど見ぬらんもとのたてるやうなるゆゑすにつけても
たゞ此古今集の歌のさまにこゝろをよせつゝたまへる遠鏡と侍る
書まふつらいとよくはけすへてかくとなむたくふ深きに御志ふかく
たちをわすれめそして子たちかほくまねふたりとふは日ならや
くらちぬいさは何くれ墓うまつらんとて春村ぬし大平ぬし
殊なし君いてゆきかの御墓にゆきて見は幸よかくてら見ぬ
まとを云ふ人ともよ物たとらふはあひさよく人々のうたともおほ
かれとこゝみなうしつこよみつ有信ゐ峯此いありゆ
かんとて常まはりぬ君くて此おへらさまよ志たなりそておほえまとた
ぬらるたちいふ者

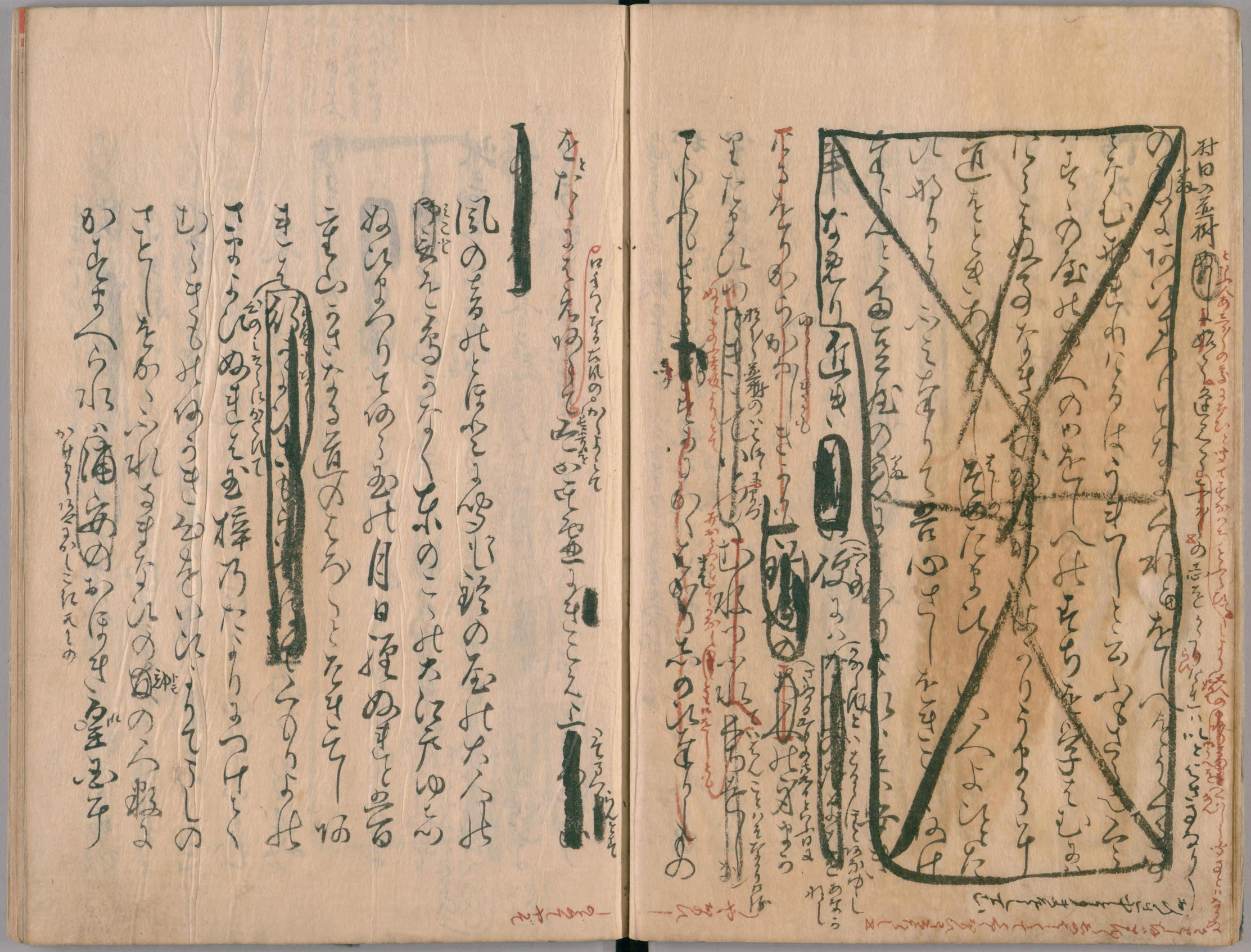
享和元年

十月廿四日此歌ハ青木茂房

享和二年六月十七日七星長行寫

享和二年　　村田並木

享和二年九月廿八日　伴信友寫



国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

言麻久畏伎秋津比古美豆櫻福大人登称辞
竟奉神乃命乃大御霊能御前尓信嬬恐

美恐美白久大人命乃大御国乃故事曲
怡知賜流餘古支記傳乎始米種種乃書乎
撰賜比豆国乃道乃正久貴伎理乎宇麻羅尓
諭志教賜比且詞玉緒乎始米種種乃書乎
撰賜比豆言霊乃幸波比上代乃麻尓尓宇麻
羅尓諭志教牙給布大御恵尓依豆志
遠遥奈伎信数等我輩尓至麻豆
大御神廼
奇霊道且言霊乃妙奈緒乃通乎
宇加加比知緒乎得志有恩頼乎
礼斯美奈恩奉流故是尊畏美宇
乃毛日毛今日仁当礼留裕大人命乃
村田並木賀宅乃奥掃比浮雲斎比祭礼大
石隠坐志九月二十九日乎以豆

人命能御像乃　大床乃　御前仁　信夏賀
若狭国乃　遠敷乃　奥山尓　根這布　葛乎　耳五　熊
川乃川乃中瀬仁　鵜浸志　古古袁　袁呂呂仁　畫
鳴坐流乎　机代登　貢奉　畏美畏美　白久　今如
光尊美　慕備奉流　志乃　久赤乎　憐美　恵美賜比
奉祀物乎　平祢安　良祢　聞看賜比　信夏我　伊
蘇志武學乃　業乎　日夜尓　護幸倍　輔　賜倍登　額
突烏呂　餓弥恐美　恐美母　白

かゝるうしなさまをも

うきあくるもおなしなるとも世をあつ神のゝ

ぬきてゝみこゝゝ云ゝ世業

享和二年九月二十九日

[redacted]

伴信夏

時雨日記

享和元年

時雨日記

長月廿九日ごろ思ひがけなく東路の
ものこゝろふりて来る雨の降りて
夕つかた京見屋の豊生伝久のもとよりとて
のよしふてゝみおこせたりいそぎ
給屋大人まさきやまひしり給つるよし松坂の人
もいとおこせたれば有伝と出立
ありこいなぐてとぞ近比ものも御文ハ給ふ
るものを美濃より有るもむと思ひ出
む祝ふべきうつてもむとこゝろ
なしやどもも旅ぢもなくいとまもこゝ
くふ何くさのさかりの中ちく明る天日の春ふ

出立ぬかくて桑名の里でいと佐屋川を舟より
くるふ汐満をなるまほど時雨あるそれ
るゞやこゝぎ出ぬ汐満うの時ワのそれ
ゝ
大人ゝ舟ゝ中ゝ此ゝ所ゝのでくふおこてあ
祝ゝしゝと云ゝとゝこゝもて
くゝをるゝとゝ所ゝほゝどもなくゝちゝゝ夜の
しゝくゝまゝをゝこゝゞ所ゝうゝゝともゞる
くゝるゝふ祝ゝなゝれゝおゝくゝあゝゝ祝ゝどゝんのいゝ
ゞゝけゝやゝおゝれゝじゝあゝ堂ゝゝこゝて此のゝ
らゝれゝ

河ふ祝のゝやゝも汐ゝ屋く書ゝ万ゝ
速ゝ秋ゝ此ゝ所ゝ祝ゝ祝ゝ
已ゝ時ゝでゝうゝ桑ゝ名ゝふ祝ゝて、かゝちゝあゝ
く町屋川をゝとゝるゝて
ゝまゝちゝや河ゝ堂ゝゞゝつ岩ゝ原ゝちゝや拾ゝて
ゝゝゞ堂ゝゞゝ名ゝゞゝ堂ゝゞゝゝゝくゝゝゝほゝゝも
かくゝいゝゝと思ゝいゝとかゝよゝとくゝさゝゝて論(ユマ)るゝふゝのゝむ
とゝい河ゝやゝうゝさゝゝゞゝこゝと毋(ト)戸(ジ)の岩ゝふゝいゝゝゝ先
拾ゝつゝさゝるゝとゝも元ゝものゝせゝで堂ゝゝるゝゝもくゝゞゝくゝゝる
ゝゝゝきゝいゝうゝで思ゝとゝく、生ゝれゝゝゝおゝゝゝゝとゝおゝゝ祝ゝる
なゝゞゝゝゝきゝゝゝゝ拾ゝぬゝるゝもゝいゝとゝあゝゝちゝゝきゝなゝゝゝゝかゝゝうゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

行ばとゝ言る國の川辺まで日くれたれば夜も
ほゞ〳〵もゆる乃はし〳〵思ひ風乃こゑ北のなや
まし〳〵れハおとこ乃ゆくへもしらぬかとゝ言
しこゑ乃ゆゑ弟子乃弼(ヤク)まで宿やどりぬる仮屋
の床のたゝゝさハ数ハもなく云
大人の出うゝ行こゝ人まかゝるまで
ねまゝハ

苔まくら旅のやどりの夕ゝきこゑも
涼ハ思ふまで思ひをしぞおもふ
て北の弟あいう郎乃ちゝ出ぬ
弟の乃ゆくしいさ残ある云

乃ゝゝ者くいぶさむ面(オモ)見てしづも
弟乃ちハ北のまるゝ出るくて
七日
きのふいさくゝ法こゝ出れハ籠(カゴ)といふ
もの乃ゝて夜涼くやどりを出ぬ玉垣
といふ里乃ゝて夕ゝ鶯乃なきゝれハ
ゆがい乃ゝる人まるゝしうちむきて
千とせを云ゝ松ゝ
おさしきうゝなゝ乃ゝとゝ
つゝ子乃弼(ヤク)て昼ゝうてゝ
さるゝ海のおもての云づらしげなるもゝのい

そぞろふんとむしぐくもつゝ稲
いせ物語のおきつ浦ふましくも
見るとはらしてえびをひつゝをもく
あ波乃松原のえへをてゝ原よ
あ波乃浦のつゝ、松原まつぶさま
見るをぞいと物るさくいるせを
申物時ぞうりよ松原よ出てまゐ稲城大王
ぬしのもとよりとをるく
大人物ほうへいうにぞとりてふいよし月乃
花のうふなむをを物ひぬるをいとをふ事おどろ
れも祈ぞうりて祈ふもなしまだしかく

らひてかの人よりをるべきをれてやどるへきあるよ
入てものくひなどして夫より御こ洋よまろう
て春庭ゐるよりえをなるふおはるくのをこてろ
のほどおしをうれて波のをこしくるれて
出しとも出しさいをむうくなしてづくい
をじ見物ひつるよりかぞりまこをを物ひ
ほどのをれどとひうけ出をろかりていと出しを
の出へぐをあたへう祈てとくやどをを帰をて
夜もをぐうたふくを)と思ひたぐくるをおはむ
をひい出をうくおいしまつをを日ごろいとを
くようにをのしを物ひをうを祈てふ祈もさい

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

ひまさむ所をおかしく所がやをしてさしたるようをして家をこしたるをぐるも
しをくをうれくおかしく所さむものとふ雨見いかけざ
ものをこの所のるくいいうれる人ものうまこの所
まであるうをとぞ思ひるげうれゐるあをまを近き
をくうりあを作をくまをしうぐ朝ゆふをとをまをの
らをてとしをこよるをきををををしかうをを作るをうき
あをこの手をの手ををもむくいをりておしををををき
さうひのをぐなをををいの乃八乃邸面ぐをををうぐを
しをををくいの八千反出しをさにいをぐをくおち
まをるなをををぐををぐ

をるくをあるをかつをあをををををあををををふ
道をしををををくぐをなをしさ
千代もぐをををををのををををれ我
いうにををををうをまをしまをを
今をりハ和揖出をををををををををを
をひをの海ををいうをぐををををを

八日

をぐ大垣の宮橋義宮を所ハをれハ
大人ハ御(オカ)養を出をうをぐをををををををををを
ををを出をををををを御ををハ松坂より二里をを
のをを山室ををふ里の所ハ来ををををふをのをう

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

へは何里と稲荷ぬしのをしへのまゝに庵をむすぶ
所まで行くに里人の云ふは山里は何里をへだつと云
捨町ばかりのぼりそれかの所をあやまちこゝろ
やゝのぼりて峯のたかきは出たりけりお
おくはぬかづきて深く拝みまゐらせつゝまなきさ
せきに行へ岩かにうくは萱かとのみぞ思ひやるに
刹那の兄がおくつきをとろがみんば
こゝろもくれは音のみしかなり西
雪霜の昔のあきたなる君とつゞき
きゝ人かへりつゝ音こそなかりけれ
後志るしの為文字埴れど読むことまことに

しそいとをかしくしけるハ三井寺三位の君のお
をてしるしとぞ此山の寺へぞ万ぬ人里をき
といふぞかりも何とぞ木深う茂りあひてい
と神さびて所々ハいとさゝむし中尊て松
れども大きなるハ何くそでをちこち池の辺にまし
さかるく雲なく伊勢尾張の海づらハさてやられ
る福島ただくも西国よう清らかなる富士は
ハ富士の様さへちかくにも見ゆるよしこよなき
なし頂いはく見るべきも何とぬ山之名ことハ称て
大人のこれなハしておほんつかうまつる御墓所と志る
おき給ふことをきくに四方の雲ゐのをとしへ子どもの

はたらく事とのぶりまうでまゐるむかのかや
まるも又をるらしてよとおもはしてやこそ秋
しもかたの方よりさぐんやしくるしとこそてろお
きてのほど思しまゐれていとも人
ふとくおむおほせられたるかをのかさふふち
ひさきいけりあるとて時雨るものてのるぶの俗の
おくこもりそて引ひなどせそこそ方れるよう桂宰信
いよしく歌るよ松板まるて時るこるのおほんまふりの
出仏法ようやの門のそまかしこもゆかしてやそさ
いはうまおきこをのそてくぶるでも松朔なゆふれを
しぶるよ出はら徒へして有なれいやをんのほどい

えどうりのふれまおはあ

日数経ることあり山中おくつきを
あさよひとこ長ちるこ云ハも
日をへてもいとゞおたきの山路井乃
ものさびあるあ人のこころう
七月晦方とともに有信ぶこもれるいはのまを今
大人の出うへとをくくゞしてそ夜もふかくかし
つゝ月ひとをもるよ月のいとさ安れるを見て
清きるひやなかもをつぶ三ぶ
なげも又をこ夜をの夜の月

九日

義ろこいさつをぐることのいのちそのほうるる雪
ま帰るで父のおもむけどもこうろ考こしとて
嘆心をくぐろて出さぬ有伝とともにれたちの
紀清兄まとて

年経ぬる言ぐ考えんぐこふかきたくふ
ちのまをもも数るるるんやい
史まりちまくぐろて鼓ぐづつもなどしてさ学ある
ぼをゆぐじけそうのいつをは清兄などさるはいでま
奥義(オクノッキ)のあるをの小松万代ま
言ぐまをといやもぐるるるむ
大人ぢら待て志兄しる清つるよしまそかたるの

うつま橋を柱るまをるるりおのをいまるる月の平ら
ちのまをかるれぐの座ふ橋を柱るもものさとし
まや有ろんと古きとのともも思い出るれて
庭さくるさく春毎ま塚のうへ乃
をれま生ぐくて兄ん考れや考ろむ
今志はるくくてふぐりあてれるる仕ををををし
をてここ公(オホヤケ)るもやてで俄ま旅を考れ公まもの祝ど
帰るさいをうれて年の時ぐうま山をてこんとそを
うのちくまぬるづきて
見畏の荒心中まを考をおをて
ぢうれてい拙くあきま学るる祝ども

有信もふせりに出立ぬるまゝよ日数のかさなりて母の
所にもいらるゝおぼつかなくなるしるべ人ともよ出
よ帰るまゝとて山をくだる雨ふる雨もいとゝいざこゝろもしいろはせる
ふる雨もいとゝいざこゝろもしいろはせる
雨ぐもり出でゝ見るあしの花かな
なる道くなりて松坂のやとりに着ぬ宵書庭
雨のこゝもとまるゝてさごろもとろろ雨どもの中
いとゝにぞやふるゝふしぶしのこゝろ思いさごゝ
ゝ稲つるゝことのこれうまとしもまるる出でやそくこと
つゝ稲つるほどいとゝもでしこうりたれい
大人ぬるゝ稲つる出でゝさいさるゝものまてさ雨のかくてお
いつれば出でうまとしこのもしうあんぼつられる
十日
ふる八春庭に雨の出行まて
大人のをしへ子とあるうごろ八里をそぐ出て近さ
しうの里ゝのも有信機はゝくゝをもそびけど行けて
今の世のゝふしのゝ行るじ志ゝを行るまま
ゝりゝれいさるゝいと稲んどろまあるじ志ゝを
をゝ後出歳の世ゝ行るゝ出ゝなゝ行
し調度ゝゝゝゝて
大人をゝ出ひまるゝ人ゝのゝゝふゝのゝ
ゝ雨ゝれしゝ雨ゝの出ゝさうゝけど

桂々ん君かいろさねお母へハ
此屋戸の庭の岩むろ常盤なれも
いかでかつ君ハいろさざりしむ
かくてのほどくるを見るゆもいろ隠世ゆかし
かはと思ふまゆるさるゝこの僅されて
云狀並ふの法もるも在られこと遠く隠き
かきてけて見む君もたのき哉

十一日
かくふいつ祭を限やどかりまさしこもかくて此ことをたし
冬ん四方の方くたれるも
故大人のみこへ子と何るかぎりあも氏も冬んもくれ
しう志るし語へる書を稲城ぬしよりかてう町
ま法くしらもとそちのくのたそくゆかぐすべて世の
数罕何中乞人の数五百人だらり何乞てら祭てき
おりしもりしもちも宮そらり冬もかゝる書を見るゆも
文よりふべくも何ら祭ど
大人非ぐ古ら里の世としへ多くたぶとくゆかしく冬
ほど思ひ志られたる此里の人ぞよりこゝこのかく
若やかくてんまあそさうひの人ぞもたぞぐくまさ
冬のらん時いくまあくききに思ふらんをおしたてらんで
又も祭乃ふるさぐりて
十二日

いにし月の十三夜
故大人をしたしみし山里なるの人々稲城ぬしのもと
につどひて月をめで遊びける夜湖月山月などいふ
題をくばりて文詞をものし給ひけるが此中にも
大人のものし給へる縁（ワヒ）のおほむをきこえ給ふは有るなれ
ど此洗をのちはいでまし人々のかくはなるをきく
つきはかのみなもとも蕨村あやまりてふるさと
まことをしりてかきつけつれば
大人は井月といふ題にてものし給ひし此文の井（ヰ）
かくれてもなほきこえぬ山の井に
影をくみしき秋乃月影
といふ清き音の有りければ
清らなる音ぞきこゆる見なき人の
かげもうつるこの山の井の水
すぐれし此文のあやしく今まさりたるを
山此井の清きながれをくみてしも
そこしられぬ水くきの跡
十三夕
家には帰る日なきはいは夜をとゞめてものせん
と思ひつれとちべこきこうきこゆるしきなとして
いとう受ぬるけはひいとしきこなくて時もなれて記
出ぬ有信もう添ていはそとも帰らんとかゝるにお

きたれと十日市記伝の撰者のことまでときて此里
の人々にかたらふことどものすぶてを知る神は今もふつ
うらおぼれぬべしといふにそれぞ
故大人の御還あともなかりければされさへなるきたれは
よろふいそしこ始めしてよ君の御りにはなれ候も
御袴のすそうまもの色んをかきといひちぎりてつかふまつるや
とき世をかるあなたゐるしの日はいとめでたくやるかたもてあつふ
ゑんきしたるこてにひなをといふ法にいてぞ来

志る浪の立てかへらもいせの海の
深きなさけをふでにはつくしもせし

松坂を出て二里ばかりこれより市場といふ里のなかの
いふ石井の水是より半町ばかりしたる右文た登
をいはゆる谷玄女房抄甲斐の可つ北の方の
遺し紀をよめれなる心とてはるかなる
水之ゆくさきにはかなきをみしも心のとまりて道なる
いふ石よりて見るに水はいさゝかなるも老れと言お
ぼえていとなつかしくさまもしとき

名のみしてむかし古井の清水むすばれても
うせぬし君がこととぞはきし絲

雲出川をわたるほどに

雲出河浪はさもせつかる深き世そ
なさけしらぬ君は浅きとぞなん

けふは志ぐれぬべき雲のけしきなるを風さへ吹や
なりなんと人のいふをきゝて行ほど木がらしふとう
やいふ里のそらもみそいとつらう時雨来にけり風も
しぐれさへ有なれば世も思ひしられぬべきて此所へ旅た
立よらん未だにいたく志ぐれぬればぬれしぐれ
はまだきしるにたゝしもてきたく

こゝろよわく物おもふ旅の袖のうへは
いとゞ雨そふむらしぐれ哉

けふは名子ゆすりと思ひしを小向といふ里の見えたりけるて
日の入までぬれもしで上野の旅にはやきぬ花がたゆすりておきつ
ろしうかきくもりて雨さしく空のさそもけおかし晴て

夜に月のくまなりけれはなをし近う来てやさしき
見る山室にて月のあはれをしとすると思ひ出されて

なからへはまたこのやどにかへりくる
空行月はちぎるかなしさ

十四日
志ぐれの後はやとり所いつくもくいまなき
う雲のおきつらきしくれは
たへかれくてたえぬし給の世しきに
いとゞ氷まじむ野路の朝霜
旅ふとかふ里の田つゞきにつく沢のむれ立を見て
るうけのきりくさしてくるゆふやすきしほた

小かつきへぬくとをあんとく
和りさせる小田の沙汰なる哉
入るにぬれそふ雨の歩もとろ
乃ゆ雨のつんきくものふせてこの
出てれて今とを返いふ七夕せ
ちるとてるなりてしこの花く
さきのこりそれい
あるとて世に生ける事を雲花乃
夫婦世界とをとるの事あるの
かの沖でとりをおくかつをたつ
ゆ雨日記

心室乃ちもいたくとしらるその
生をうれの沢茶屋よりるにふふはなずし厳とや
ふ厳のをとを語へるりて旅人やとを茶このをてさ
しのひしれいおのきハ下里なふらしとふ高人の茶と
ふしてやとをとをぬさるふとしみ有の沢田くをれを
ことをもりてある里小買いつをりの沢やをしく
ふれるむつひかせる人なれあるしこ高ひうけをいとを
づくしとそいくこうをろこびてあるをくれとあるらしいと
祝をとるにかるこひあ迫をあるりのむつまし紀をうをと
ひのをこ沢ふひ来て夜立るるでをあくかるふよいをこかん

おくることはてて七月八日の夕方ゆうぎりあんみ
ける
十五日
たべのかるいやぐこのうら称ふぶとうまるそよとあるし
のせちよとそむるをこのれそちよ別るく和よのをぬそふ
はいとをくてのとれれを四方のこんをこしことふ面
ふしはとてりの汀をこれくまもうるのも芦の方く生
志ちをてるうを和指てものさしけしけなを
能登川の岸ふかれてつくれ芦の
をうものはいか赤称をもたし
今ようを学ひのをしいうをうを遊ばんるを

志川ふれる舟のうちのようつふふくあいをんくをやをきく
をこにりとせくて和人をものちくのかをりさしいふ
つをれとのほをふ称るれかくうして来の時をうを
は能登の浦辺うををうこを形勢何ふの物をもは
るでのほるこのをいづくよ物をるを和ををいをを和を穂出
まるんをいくふおのをは能の里人をてはおのう里をもをう
るれはいををき侯和るるのせをんやをふうへなるれ
はいをうをしうてやうて和ををふ和をうつを夏晴
のくふおこしまでは寺やをくはりをを浅をふををこしこに
風のるをれは中陸のをうこをまて日くれるんを和をのは
ゆるををにはいしことくをまて望四乃をを日を日を

あれはそこにて祇園をおがみてかちをもくかくて成の
時ばかりにまんぞくの家にはいりぬる
はきをしいもくも侍りぬ
こよひも祇園うつくしかりき
さいはいの侍りこぶる家の人をとりぶかつぐうきう
やう茶のさんぬるこちいはしりたり
ここの家ともかの茶屋思ひとうぬほどのそこそ
たくもつかうしくもおぼゆ
いとこそかしうをこのるもおぼうえれどころも
はたらくなりでいえばべきものもつかはしや
さまれとそちん

享和元年
卯五月十九日　祇足

ことしやよひの比人をいざなひて山室の花見
まいりして
大人ばかりなる
山室の町繁昌の山ふたうとこころをとて
見てう祇てきるしのををそをくそ
ちをる
山室まちもの春の宿しるそ

風ふきて花散るを見て

おれしとき

ちはやぶる神の御代より樂しき春日の

花のさかりをとゝ思ふ

我宿と苔の下ゆ出てつゝむ花を

ゝゝてうぐひす川に帰る

十月十日小春雪降るのちもとゝまれる人ゝ

ゝゝ時なるしのゝゝて出しを

霞ゝ春を出しを

さくらのゝをつゝるふつけても

ゝゝ人のゝ時ゝゝゝの

かさあり川をゝてゝゝれば出しを

松原より帰て後桂松有侍人ゝ

ゝて歌をゝゝゝ

故人ゝゝゝゝゝゝ貝ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

桂里

紅葉ゝ原風ゝゝゝ

ゝゝゝゝ乃海の花ゝ

むれしを見を原風の

浪の泳しゝゝゝ

ゝゝゝ

[illegible]

友家

う船七艘むなしきを見るいせの海乃
浪の音ものすごいやまつゝぬ[illegible]

此ごろ花沖の新人（オヨシ）が義経をうつのものこと一ヶ月の末美濃より伊勢ぶりの時のそのこゝろまうてゝ明日をく[illegible]
うつのこゝろとうるし塗りのいとあるを[illegible]
[illegible]
文化元年七月十日

俳
[illegible]

明治四拾年八月　伊信美尚の曾孫
信真氏より譲り受く
濱雄

濱雄藏書

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『なげきのしたつゆ時雨日記』　請求記号 121.25-A582n

ガラス使用